

## 河童の眼で人類学する

人類学のような活動を始める前から、課外活動をいろいろとやってきた。というより、課外活動をやっているうちに、気がついたら人類学をやることになっていた。そういう私からすると、「研究者なる（になりたい）者、研究業績になることしかしてはいけない」というような空気の充満している昨今の大学は不自由でたまらない。

そこで、カップになってみることにした。私は、実名のほかに「おいけのかっぱ」という名前をもつ。建前としては、俳句を作るときの俳号というやつである。この名前は、京都大学理学部植物園の中にある池の中に棲んでいると云われている、御池ノ河童というカップにちなんで、つけてもらったものである。

この植物園は、たかだか1.2haしかない小さな植物園だが、今年で85年の歴史を有する。大正時代に田圃を造成して、縄文遺跡の上に作られた。郡場寛という京大の初代植物学教授が、本来農学部になるはずの土地をかっぱらってつくった、植物と小動物の楽園である。貴重な標本木だけでなく、「雑草も大事な観察対象である」と言う方針のもと、放任主義により作り出された「生態植物園」である。

人間でも動物でもないカップの眼から見ると、この世の中はきわめて新鮮で、遊びがいがある。なんでも研究者の世界では、論文の掲載される雑誌のインパクト・ファクターなる基準が大事だと聞くが、つまらん話だ。混沌とした世界に秩序を持ち込もうとすると、必ず失われるものがある。それは遊びだ。システムに絡み取られながら、現代のジンルイガクシャは、いったいだれとどのように遊びたいの？

カップは、出勤時間を気にする必要はない。カップは、論文数を気にする必要はない。カップは、単著があるかないかを気にする必要はない。カップは、人間の好きな噂を気にする必要はない。カップは、人間の言葉ができないからこういったもろもろから自由である。人類学がつまらなくなっているとしたら、その理由の一つは研究という営為そのものに官僚的思考が忍び込み、自由さがなくなっているからではないの？そもそも、〇×学とはこういうものでなくては、という思考には遊びがない。

学問ではなかったものが、学問になる。科学ではなかったものが科学になる。その過程で、思考が保守化してゆくのは避けがたいことかもしれない。最近、わたし自身、日本というシステムの中で「研究者として生き延びよう」とすることにより、その波に「意識的に」飲み込まれつつあることを自覚する。

カップ業にあこがれた「おいけのかっぱ」は、数年前に小さな植物園が、やはり特権によってつぶされるかもしれないという状況が生じたとき、それに危機感を覚えた大学の非常勤職員が中心となって行われ、結果的に8年もの間、101回にわたって続いた毎月異なる生き物を取り上げた自然観察会に参加することで、人間とは異なる生き物の眼で世界を見るということの豊かさを学んだ。

人類学には、骨や化石や土器から見る、行動や食生活を見る、文化を見るなど、アプロ

一チは異なるにせよ、人が人を見ることの限界に挑戦するという面白味があったはずだ。それが生きた挑戦であるためには、研究者には人類そのものを相対化する眼が必要なのである。人類あるいは人間を所与の概念とし、その内側から云々しているだけでは無限自家撞着の蟻地獄に落ち込むばかりであろう。人類という括り方自体が、一部の人間が勝手に作り上げたものである。

「人類の、人類による、人類のための人類学」など、カッパの眼にはどうでもよい。どうしたら私たちは人類を超えるものの見方を手に入れることができるのだろうか？今のところ、私に答えはなく、ただただ悶々と駄作を作句するばかりである。

しかし、人類学は自己革新の学問であるとするならば、希望を捨てることもないだろう。俳句の伝統の一つである諧謔という自己を突き放す眼差しは、身近な世界にまだまだ無限の可能性のあることを気づかせてくれる。また、俳句は自分がいかなる状況に置かれていても、世界にはなにがしかの面白味があることを教えてくれる。そういう目で世界を見てゆくと、どんな時でも発見がたくさんあって退屈することはない。

最後に人間の私にとって、あまりに遠くてあまりに近いアフリカはカメルーンの調査地で（を想って）、詠んだ俳句をいくつか紹介させていただいてこのエッセイの終わりとしたい。

冬初め阿弗利加の子にぬひぐるみ  
出力自在電気鯨は偉大なり  
人間の匂ひ恋しき安居かな